

原著＜論文＞

幼児の領域（表現）と小学校課程（図画工作科及び生活科）との相関について
—学習指導要領に見る造形分野の於ける指導法の関連を探る—

松下 明生*¹

1. はじめに

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂され、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園はいずれも「幼児教育を行う施設」であり、共通の見通しをもって子どもの学びを支えていく重要な役割を担っていることが示された。今回の改定は、3つの施設は学校教育の基礎を培う場として、小学校以上の教育とのつながりを明確にしたことが特徴といえる。それぞれの園で就学までに「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の3つの資質・能力を育てることを求め、それらの資質・能力の現れる具体的姿として、10の姿を挙げている。

さて、一方の小学校からの視点では、これらの幼児期までに育て欲しい姿を幼児教育のそれぞれの施設側と共有し、教育にあたるが必要となっている。この法令の改訂直後の今、保育者養成校や小学校教員養成校での教育内容の現状やこれからの指導法及び教科内容の習熟については喫緊の命題として、養成系大学としてもより良い教育者・保育者の養成をすべく取り組まなければならない。そのような時期が今であり、幼児教育と小学校に於ける幼小連携や接続についてはさらに検討する必要がある。教科間の連携や、カリキュラムマネージについても一考し、いまそこにある課題を克服したい。特に、ここでは幼児の領域「表現」について、とりわけ「造形表現の分野」が小学校教育にどのように繋がり、相関の関連が存在し、また課題が残されているのかを探りたい。

2. 乳幼児期の3法令と、小学校学習指導要領の改訂

2017年3月「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改訂（定）告示され、2018年4月から施行された。3法令が同時に改訂されたのは今回が初めてである。2015年からスタートした「子ども・子育て支援制度」は幼児期の教育・保育の「量」の拡充と「質」の向上を進めるためのものである。施設型給付による

*1 名古屋柳城短期大学

自治体からの財政支援を受けて運営される「幼保育連携型こども園」の数は、年々増加していて、増加率は著しい。

3 法令は文部科学省の中央教育審議会・幼児教育部会、厚生労働省の保育課の保育指針検討部会、内閣府にてそれぞれ審議して改訂された。これからは、幼稚園、保育所、認定こども園のどこであろうと共通の教育が受けられるようになり、小学校から見た時に、子ども達は一定の力を持っているようにすることになった。周知の事ではあるが、「幼児教育の共通化」「幼児教育の質の方向性」「幼児教育で育つ力の明確化」が改訂趣旨であり、3才からの教育を「共通化」することが謳われている。

新しい小学校学習指導要領については、2016年12月に中央教育審議会答申により公表され、2017年3月に告示された。先行実施として教科書検定・採択・供給などが行われ、2020年度から全面実施となる。この改訂には、6つの視点により改善すべき事項が挙げられている。①「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）②「何を学ぶのか」（教科などを学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）③「どのように学ぶのか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」（子供の発達を踏まえた指導）⑤「何が身についたか」（学習評価の充実）⑥「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）これらの事項を各学校が組み立て、家庭・地域と連携・協働しながら実施し、目の前の子供たちの姿を踏まえながら不断の見直しを図ることが求められている。

3. 幼小接続の現状

小1プロブレムの課題は2000年代初頭から多くの教育者から問題提議されて久しい。当初は小学校高学年に発生する学級崩壊の低年齢化と見なされていた時期もあった。その後は、幼児期を引きずっている子ども達が引き起こす問題であると提議した議論もある。福本は「幼児教育から小学校教育への移行に伴う教育の方法や内容、学習環境、行動規範等の変化は、『段差』と捉えられた。『段差』の大きさによる子どもの混乱を小1プロブレムの要因と見なす議論は多く見られた。」と述べている。また佐々木らは、「子どもが小学校に上がれば『後はお任せ』となる、小学校教育に無関心な幼稚園教師と子どもの教育歴や発達、個性を『無視』して『一律の枠』で考える小学校教師の意識を問題にした。」と述べている。小1プロブレムは、幼稚園と小学校の途切れた関係の「狭間に落ち込んだ子ども

たちの混乱と困惑」としている。文部省委嘱研究による学級経営研究会の最終報告書「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」（2000年3月）でも「学級がうまく機能しない状況」のケースの一つとして「就学前教育と連携・協力が不足している事例」を取り上げている。佐藤らの調査・研究によると埼玉県草加市の2014年の事例では「授業や行事、研究会などにおける幼児児童、教師同士の人的交流は70%を超えるが、教育課程編成レベルでの接続は幼稚園全体の半数を下回り、カリキュラム・マネジメントの観点からみると課題があると言えよう。」と述べている。同市ではこの年の調査から小1プロブレムと言われる状況が見られると答えた教員が21.0%に上がったとしている。

4. 幼児期の表現に関する捉え方の変遷について

1956年、最初の幼稚園教育要領では「改訂の要点」の一つとして、幼稚園の保育内容が「小学校との一貫性を持たせるよう」することとし、幼稚園教育の目標をより具体化した。ほかにも、この幼稚園教育要領では、教育内容が初めて「領域」という用語として扱われ、「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」の「6領域」が示された。幼児の造形表現にあたる領域が「絵画製作」として、1989年の幼稚園教育要領の第2次改定まで存在していた。この年、「5領域」に改訂されて、現在に至っている。具体的には、「音楽リズム」と「絵画製作」が「表現」という1つの領域に統合され、「社会」が「人間関係」へと変換され、「環境」は「社会」と「自然」を組み合わせた領域として捉えることができる。

1964年の幼稚園教育要領での「絵画製作」の目標は「1. のびのびと絵をかいたり、ものを作ったりして、表現の喜びを味わう。」「2. 感じたこと、考えたことなどをくふうして表現する。」「3. いろいろな材料や用具を使う。」「4. 美しいものに興味や関心をもつ。」である。内容については、1. では（1）喜んで自由にかいたり、ものを作ったりする。（2）身近にある材料で思いのまま表現する。（3）見たり聞いたりしたことなどを絵にかいたり、ものに作ったりする。（4）かいたり作ったりしたものを使って遊ぶ。（5）みんなといっしょに絵をかいたり、ものを作ったりする。である。2. では（1）感じたこと、考えたことをくふうして、絵にかいたり、ものに作ったり、飾ったりする。（3）ごっこや劇的な活動などに使うものを作る。（4）いろいろな色や形に興味や関心をもち、それらを集めて並べたり、組み合わせたりする。（5）いろいろな色や形を使ってさまざまな表現をする。である。4. の（4）については材料や用具のあとかたづけをする。となっていて、活動

後において、子どものできるあと始末などのしつけはしっかりと身につけておくことが大切であると解説されている。これは表現に直接関わる内容というより生活に関する内容である。また、4. では（1）自分や友達の作品を見たり、それについて話し合ったりする。

（2）身近にある美しいものを見て喜び、作品などを大切にする。（3）身近な環境を美しくすることに興味や関心を持つ。この部分は、造形表現というよりも、身近な環境に対する子どものすべき姿に言及されていると理解することができる。この時代の、絵画製作についての領域は、現在の領域「表現」よりも明らかに具体性があり、わかり易く表記されていて、保育における造形表現の重要性も現在と比べても比重が高かったのではなかろうか。

現在の領域「表現」の中での、絵画製作にあたる部分を抽出したならば、ねらいの（2）感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。（3）生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。なっていて、記載された文章量としては圧倒的に少なく、かいたりつくったりという文言は、内容の部分の（4）感じたり、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたりつくったりなどする。（7）かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。のみであり、目標・内容・ねらいともに圧縮された表記になっている。

5. 小学校課程における「図画工作科」と「生活科」について

1989年に改訂された小学校学習指導要領では、小学校低学年の「社会科」と「理科」が廃止され、「生活科」が新設された。生活科では、児童が見る、調べる、作る、探す、育てる、遊ぶなどの具体的な活動や体験が重視され、それを言葉、絵、動作、劇化などによって表現する活動や、さらに遊びまでが内容の一環として強調されている。このことから生活科の内容には、絵を描いたりして行う表現活動も含まれていることがわかる。1987年12月に発表された生活科の最終答申の中で、そのねらいは「生活科は、具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養うことをねらいとする。」としている。生活科という新教科の設置する必要性については、幼稚園では遊び中心の生活を送ってきた子どもたちが、小学校に入学したとたん、教室に閉じこもって教科別に別れた知識中心の授業を受けることになり、幼稚園教育と小学校教育の連続性という観点からすると、両者の間に大きなギャップが生じて

いたということにつける。東京都立教育研究所報告書(1986)によれば「子ども達は、実体験、つまり身体的な活動を経験することによって、精神的な活動を促し、行動化・定着化に導くことを可能にする。」ある。竹原市の中学校教諭の報告(朝日新聞朝刊掲載1988.11/8)では、中学生153人にニワトリを描いてもらい、その作品から正確にニワトリを描くことができたのが3人のみであり、10%以上の生徒が、ニワトリの足を4本にして描いたという事である。生活科設立当初の、様々な文献等では、実体験の軽視による弊害や、見る体験の必要性など記載がみられる。「多くの見る体験の中から、一つの知識へと高められていかなければならない。その時はじめて、量は少なくとも、応用のきく、深い知識が獲得される。これが問題解決能力のもととなる。」とある。

「図画工作科」では、1977年の学習指導要領で、幼稚園などの就学前の造形活動との関連を考慮して、初歩的・総合的な造形活動としていわゆる「造形的な遊び」が低学年において新設された。1998年の学習指導要領では、生きる力を育成することを基本的ねらいとして「ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着をはかり、個性を生かす教育を充実すること。」ある。特に図画工作科では、内容を2学年まとめて示され、また材料を基にした楽しい造形活動(造形遊び)を従前では中学年までであったが、多様で創造的な表現を促す観点から高学年まで拡充している。2008年の学習指導要領は、教育目標に「感性を働かせながら」が加わり、表現と鑑賞の一連のプロセスで働かせる感性の重要性が明確にされている。この時、他教科等や幼稚園教育との関連では、低学年の特性を踏まえ、生活科などとの関連や、幼稚園教育の表現内容との関連を考慮することが示されている。文部科学省検定済みの教科書には、1年生から6年生まですべて「造形あそび」が載り、幼児からの連続性が一見してわかるようになった。2017年告示の学習指導要領では、図画工作科における、指導計画の作成と内容の取扱いで、「他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割りの設定を行うなどの工夫をすること。」としている。

これら「図画工作科」や「生活科」に関する学習指導要領の内容と変遷及び幼稚園教育要領との関連については、小学校教員は幼稚園における教育内容を知る必要性があることを示していることは明確である。

6. 制作を行う観点による教育内容の分析

①「造形あそび」（幼児造形・図画工作科・生活科）

造形活動を「あそび」につなげていく活動、もしくは造形活動を「あそび」としてとらえ、季節やその時々素材や材料に出会って創作し、楽しい遊びの活動として行う活動である。1977年の改訂により、順次高学年の授業に拡充されて、それまでの作品至上による評価から変容して現在に至っている。こどもが、描画や制作すること自体に喜びや楽しさを見出す経験をさせることに重点を置かず、「あそび」というキーワードにて教師たちは、図画工作科の授業に於いて授業自体はやり易くもなった。教員養成系の各大学においても、教師の造形能力の鍛錬よりも、楽しく遊ぶ方法に重きが置かれた様相にもなって久しい。授業に、教材として作り方の決まった「造形キット」を業者から購入して制作させる図画工作の授業はいつから当たり前になったのであろうか。授業準備が楽であることは勿論、作ってあそぶシステムに当てはまった教材は主要教科のワークブックや補助教材と同様に購入されて授業にて実施している。

幼児教育の現場のことを述べると、保育者は自ら廃材や自然物などの資材を集め、どのように造形表現の活動を行うのか探している。幼児については教育要領は存在するが、文部科学省の検定済みの教科書は存在しない。教科の存在しない幼児教育では、毎日何を行うのかは園の年間指導計画や月案を念頭に、週案や、学年の横のつながり及び縦の流れを勘案して計画を練っている。「あそび」という前提による保育・教育についての方法は、教科書ではないものの、多くの方法論を掲載した書物は発行されている。例えば、今から45年前に出版されている図書では、一色八郎「幼児のための科学あそび」1973（ひかりのくに株式会社）がある。藤田復生「紙あそび」1975（教育出版株式会社）、木村恵一他「描画あそび」1976（教育出版株式会社）、松井公男「総合あそび＜観察編＞」1978（明治図書出版）、郡司修三他「表現あそび」1978（明治図書出版）など、枚挙にいとまがない。

幼児造形の現場では、以前より当たり前に造形あそびを保育内容として研究実施されていることは自明である。小学校の初等教育の授業に行うこととしては、文部科学省認定教科書と教員用の指導書にて、授業計画を立てることができる。そういうことでは、幼稚園教諭と比べても、教科書があることで授業のカリキュラムマネージの方法に大きな違いがある。幼稚園教諭をはじめ、保育者は、幼稚園教育要領に示された、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を理解して3才児からの幼児教育については特に意識をして実行することが求められている。そういう実態を、小学校教諭は理解して、「小学校入学当初におい

ては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割りの設定を行うなどの工夫をすること。」を念頭にカリキュラムマネージすることが必要とされている。生活科の教科書には多くのページにて、図画工作科の教科書よりも造形あそびの紙面数が多い。比較しても、作ってあそぶということではどちらが図画工作なのかもわからない程である。

上記の改訂の内容には、生活科を中心として行う必要性があるとして、図画工作科においても授業内容の計画では特段の研究が必要であろう。図画工作科における具体的な改善事項としては、教材や教育環境の充実として、「児童生徒の実態に応じて題材を工夫することが大切である。特に、表現の学習に使用する教材については、個性やよさなどを伸長する観点から、一人一人が、自分の良さを発見し喜びを持って自己実現を果たしていく態度の形成を図るように、児童生徒の実態に応じた多様な視点から設定することが求められている。」となっている。果たして現状においては、各業者の販売する「制作キット」を購入して授業をすることでは教科の具体的改善になるのかは検証されたことすらない状況であり現状では計り知れない。

②「絵画（モダンテクニック）」（幼児造形・図画工作科・生活科）

モダンテクニックは絵の具あそびの技法である。幼児の造形教育の方法論として、どこかの保育者養成校の授業で行われているものである。スクラッチはオイルパステルを使用して、絵本：なかやみわ「くれよんのくろくん」2001（童心社）にもあるように、子どもが自らあそぶことができる活動である。デカルコマニーやスパッタリング、ストリング技法、ローリング、スタンピング等の技法は、描画が苦手な子どもでも誰でも楽しくできる「あそび」でもある。総称としてはテクニックということもあり、これらの平面作業の技法は他方面へ広がりを持ち、教育者の裁量によってあらゆるあそびへと繋げていくことが可能である。ここに紹介した以外にもフロッタージュ技法、バティック、ドゥルーピング、ステンシル、マーブリングと保育者にしてみれば、有難い保育内容である。

これらの「造形あそび」の技法は、小学校の図画工作科でも扱われている。幼児期に経験したモダンテクニックではあるが、改めて小学校期にも経験することになる。文部科学省検定済みの教科書「図画工作3・4下見つけたよためしたよ」平成26年2月検定済み（日本文教出版）p.57ではマーブリング・デカルコマニー・スパッタリング・ドリッピング・吹き流しが掲載されている。その技法の方法を写真と絵によって説明もしている。小学校低学年ではない、この教科書は小学校中学年である。保育者は、これらの小学校図画工作科の教科書を閲覧する機会がない。よって、どの現役保育者も、これらの技法を小学校図

画工作科で学ぶという事実を知らない。また、中学校美術科の教科書を確認したところ、「美術1」平成29年発行、平成27年検定済み（光村図書）pp.52～53では、フロッター・ジュ・コラージュ・デカルコマニー・スパッタリング・ドリップング・マーブリング・吹き流しが、小学校図画工作科の教科書と同様に写真と絵を載せて説明している。また、日本文教出版の平成26年印刷の「美術1 美術との出会い」でも、p.45で、ドリップング（たらし絵）、デカルコマニー（合わせ絵）、スパッタリング（ブラシぼかし）コラージュ（はり絵）、ストリング（糸引き絵）、マーブリング（墨流し）が同様な記載がある。2018年度（今年度）の本学保育科の図画工作Iの授業にて上記技法の方法論を行った際に、学生はこれらを勿論幼児期や小学校期にて体験したことを言うが、中には中学校の美術でやったと言う学生も存在する。つまり、これらの技法は幼児期の絵の具あそびにとどまらない表現あそびとして理解しなければならない。幼児がやっても中学生が行っても、楽しくあそぶことが出来るということである。この事実を現役の幼稚園教諭が知ることはない。保育者は、子どもが卒園して、小学校の図画工作科で何をしているのかを知ることができないということである。これでは、平成29年告示の3法令改定の幼児教育の質を高めることは難しい環境下であることは否めない。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の理解と小学校への接続の強化へ向けての取り組みについては、保育者養成及び小学校教員養成に携わる大学・短期大学（専門学校を含む）での学びについても検討されることが必至である。この法令改定は、質の向上のために、現役保育者に向けても研修の体系を整えるといったことも提示している。

③「絵画（描画）」（幼児造形・図画工作科・生活科）

モダンテクニックのように、絵が上手いとか下手とか関係なく誰でも楽しく絵の具あそびができるような保育内容や小学校中学校の授業とは違い、具体的に何かを描画するという課題（演目）については、授業者（保育者）にとっても被体験者（児童・生徒）も、苦手意識を高めてしまいがちで、悩みの種として扱うことが少なくない。実際のところは、この「子どもの描画」についての方法論への悩みが多い。運動会の後に描く体験画や、絵本や紙芝居などの後に描いたり自分でお話をつくって描く「物語の絵」などについては、まだしも、実際に見て描く「観察画」にいたっては最近ではほとんどの幼稚園では行っていない。小学校になっても、教科書には楽しく作ってあそぶを全面に押し出していたりすることで、子どもの描く能力を伸ばしているのか心配な状況である。筆者の調べ（2015）では「①35年程前の子どもの造形教育の中でも絵画教育については、具体性に富んだ作品

を授業や活動で制作していたが、現在ではあまり行われていない。②35年程前は、見るこの意味を教え、良く見ることを奨励して、描き方の手順まで言及して授業で行っていた。③現在使用されている教科書掲載（小学3年生）の描く能力は、35年前の幼児向け参考図書の掲載作品と同程度かもしくは35年前の掲載作品のほうが、子どもたちは対象を良く見て具体的に描かれていた。④小学校3年生までの現在使用している教科書に掲載されている実技演目は、小学校入学前の幼児期にはほぼすべての内容で既に経験した『造形あそび』に属する。⑤現在の図画工作のねらいの『あそぶ』というねらいが教科書全体に行き渡っている。」としている。

子どもが、お絵かきが次第に苦手になり嫌いになる大きな要因としては、筆者(2012)が大学生425名に調査した結果として、まず①イメージがわからなかった。②描き方がわからなかった。③思い通りに描けなかった。④時間がかかりすぎて仕上がらなかった。⑤友人と比較された。⑥先生の指示や指導に不愉快な気持ちになった。⑦展示された。ということが分かっている。

幼児期の子どもの成長・発達を学ぶ保育科の学生は、幼児期のみを理解しているのではなく、小学校期の子どもの姿も学ぶ機会が必要であることは間違いない。幼児期に達成されていない子どもの姿があれば、引き続き小学校教員はその子どもを受け継いで、子どもの成長を促していくことが必要である。造形表現のあそびや学びは、図画工作科へと引き継がれて、同じ演目であっても、幼児期とは違うアプローチにて楽しく学ぶ環境を整えることが必要である。新しい小学校学習指導要領の6つの視点の1つ目である「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)については、図画工作科でも楽しく学ぶ過程で、描く能力についても伸ばしたいものである。そのためにも教師の資質・能力も高めなければ達成できない。2つ目の「何を学ぶか」についても、図画工作を学ぶ意義を理解し、単に楽しくあそぶだけでは達成されることはない。教科間の横のつながりや、幼小、小中、中高の縦のつながりの見通しを持つことで、各学校の学校教育目標において育成を目指す資質・能力を、教科等における資質・能力や内容と関連付け、教育課程として具体化として設けられている。つまり、幼・小に於いても、つながりの見通しを持つことが出来るようにするためにも、保育科であっても小学校での学びにつなげることを知ることをしなければならない。

7. 本学保育科卒業生の「保育科での学びのアンケート」から

本学を卒業した 34 名に以下をアンケート方式にて質問紙に記入してもらった。2018 年 3 月～4 月に実施し、本学保育科 2 年の学びについて振り返ってもらった。

保育科で学んだ学生へのアンケート		(質問紙)
質問①	これまでに、あなたは小学校学習指導要領について何か学びましたか？何か知っていることはありますか？あれば何でも構いませんので以下に書いて下さい。まず、以下のどちらかにマークして、その下に記述して下さい。	
	「学んでいない」・「学んだ」	
質問②	幼稚園教育要領はじめ 3 法令の改訂にて、明示されている、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について（10 項目）について保育科にて学びましたか？そして今、それを知っていますか？いくつかあげて下さい。まず、以下のどちらかにマークして、その下に記述して下さい。	
	「知らない」・「知っている」	
質問③	小学校の先生から見たときの「幼児教育で育つ力の明確化」について知っていますか？知っていればどのようなことが書いて下さい。まず、以下のどちらかにマークして、その下に記述して下さい。	
	「知らない」・「知っている」	
質問④	幼児の造形教育は、小学校に入学してどのような科目に繋がり、どのような子どもの成長に有効であると考えていますか？	
質問⑤	幼小接続（幼児期と小学校期の接続）についての重要性について、短大ではどのようなことを学びましたか？学んだと思う人はどのような事を学びましたか？ まず、以下のどちらかにマークして、その下に記述して下さい。	
	「学んでいない」・「学んだ」	

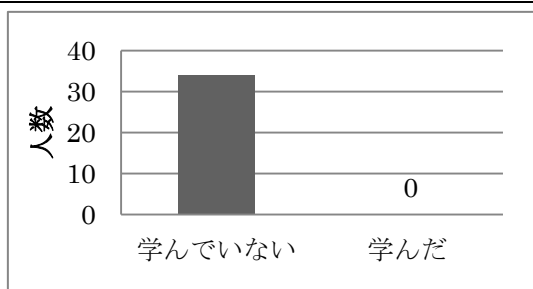


図 1. 質問①の回答

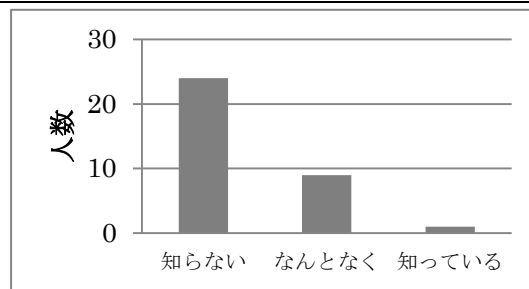


図 2. 質問②の回答

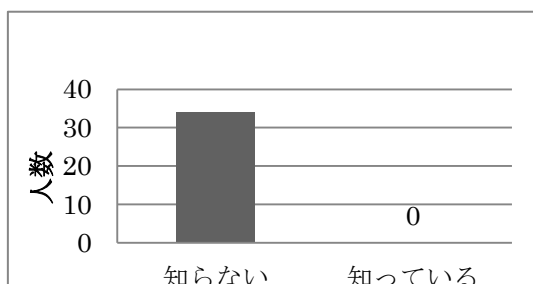


図 3. 質問③の回答

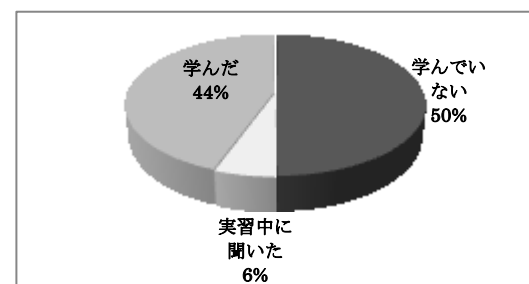


図 4. 質問⑤の回答

質問①の自由記述については、知っていることについての記述回答はなかった。質問②

では授業で聞いたようであるが覚えていないという回答があったものの、知っていると答えたのは1名のみで、あとは知らないと答えている。質問③自由記述した回答者はいなかった。質問④では、図画工作科が筆頭に、生活科(理科)、道徳、国語科という回答があった。子どもの成長に寄与するであろうことについては、「想像力や協力性を育み、子ども一人ひとりの個性を育ませることに有効である。」「記憶力を上げる。イメージ、気持ちの表現、物を正確に伝える、技術を磨く。」「幼児期に行った造形教育は、小学校教育に生き、学びの起源になるのではないかと考える。」「科目全般の基礎になると思います。自発的に考えて動く力や、集中する力、自分らしく生きる力を育むことに繋がると思います。」「手先が器用になる。」「創造力を豊かにする。」「物づくりに直接的に関係しています。」等、ほとんどの回答者に記載が見られた。質問⑤については、学んだという回答とそうでない回答にわかれたが、実習中に聞いたという2名もいた。

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3法令は、2017年3月31日に同時に改訂(定)告示されている。アンケート調査の回答者は、上記3法令が改訂されて1年間は本学で保育や教育学を学んでいる。回答を見る限り、これらの改訂については学んでいたのかどうか疑わざるを得ない。2018年4月より、施行されるこの法令の学びができないまま卒業したとしているのならば、早急に改善策を練り実行する必要がある。改訂以前には、既に2016年12月に、文部科学省中央審議会答申として「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援の学習指導要領の改善及び必要な方策について」が発表されている。そこには既に、「幼稚園などにおけるカリキュラムマネジメントについて」「幼児教育において育みたい資質・能力と幼児期にふさわしい評価の在り方について」や「幼児教育において育みたい資質・能力の整理と、小学校の各教科等との接続の在り方」などの記載もある。

8. これからの保育・教育者養成校として

2017年3月に改訂された幼稚園教育要領及び、小学校学習指導要領において、今まで以上に幼児・児童の学びの連続性を視野に入れた幼小接続の重要性が強調された。幼小接続をカリキュラム上で具体化していくにあたっては、その指導者である教師自身が幼稚園教諭と小学校教育に精通していることが重要であるといえる。松永らは、「幼稚園教員が小・中の学習指導要領の内容を知っている、小学校教員が幼稚園教育要領や高校の学習指導要領の内容を知っている必要性を示している。」としている。4年制大学によっては、保育者

養成と小学校教員養成をすることが出来て、その幼小接続に関する学生への教育体制や教育の内容についても研究が進められている。松永らは「幼小接続を見据えた教員養成の在り方に関する研究」（2017）で、教育実習指導で以下の3つを提言している。①幼稚園での教育実習生と小学校での教育実習生が互いにその教育及び保育の在り方について理解を深めるような機会を用意する。②小学校の教育実習生が幼稚園教育要領を読む。（幼稚園の教育実習生が小学校学習指導要領を読む。）③幼稚園での教育実習生と小学校での教育実習生が、互いの教育理念・実態や子供の様子・成長の在り方などについて意見交換する。また、一緒になって、どのようにすれば円滑な接続ができるかを実践的に検討し、実施していくこと。の以上3つである。

保育者養成の3法令改定の根幹とされるものとして、3歳以上の子どもの幼児教育の共通化がある。「3歳以上、1日4時間」の幼児教育は、どの施設に通っても共通に受けられる内容にすることとしている。幼児教育の質の向上と共通化が担保され、小学校教員や中学校教員までもが、子どもの育ちの繋がりを理解し、義務教育後の高校教育まで視野に入れたカリキュラムマネジメントを実行する新しい時代となってきたことをそれぞれが認識して役割を果たすことが必要となっている。

9. 最後に

本稿は、幼児期の表現と小学校児童の図画工作科や生活科についての保育や学びの連続性をそれぞれの観点により、新しい法令と関連して、見える問題や課題を指摘している。子どもの造形教育は、先人の様々な美術教育概論や研究によって構築されたものであり、昭和のある時期には「絵画製作」という独立した領域として扱われていた時代もあった。「表現」という現在の領域から、小学校の図画工作科や生活科の「作ってあそぶ」活動の重要性や、それらの学びの連続性等を理解しなければならない。保育者や教育者の養成校は、新しい「幼稚園教育要領」等の幼児期3法令や小学校学習指導要領などに示された教育内容や方法の中身を迅速に学生へ教授することが望まれる。この春、本学保育科を卒業した学生達は、それぞれの保育所や幼児教育施設にて就労している。次年度の卒業生までもが、「知らない」「学んでいない」では済まされない事案であり、養成校に於いてのカリキュラムマネージが必要であり、教員は、それぞれのシーンで、または授業にて新しい告示・施行された内容を教授することに努めたいものである。

参考及び引用文献

- 佐藤環・菱田隆昭(2017)「小学校との接続・連携を強化する幼稚園のカリキュラムマネジメント」茨城大学教育実践研究 36, pp281-294
- 福元真由美(2014)「幼小接続カリキュラムの動向と課題」教育学研究第81巻第4号, pp14-25
- 姜華(2013)「幼稚園教育要領における教育内容の変化に関する一考察」早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 20号-2, pp81-90
- 松永康史・森川拓也・田端智美・上村昌・北島信子・辻岡和代(2017)「幼小接続を見据えた教員養成の在り方に関する研究」桜花学園大学保育学部研究紀要第16号, pp139-159
- 花田千絵・堤一彦(2017)「幼小接続期における造形教育に関する一考察」作新学院大学作大論集(7), pp249-268
- 松下明生(2012)「子どものお絵かきの嫌いになるとき(小学校図画工作指導の現状分析と研究者への提言)」浜松学院大学短期大学部研究論集第8号, pp31-48
- 櫛田磐・田中康善・土橋美歩・小池俊夫・青木實『『生活科』を創る』(1989)学芸図書株式会社
- 今谷順重「生活科の授業を創造する」(1989)ミネルヴァ書房
- 藤田復生「紙あそび」(1975)教育出版株式会社
- 藤田復生・木村恵一「描画あそび」(1976)教育出版株式会社
- 松井公男「総合あそび」(1878)明治図書出版株式会社
- 松井公男・郡司修三「表現あそび」(1978)明治図書出版株式会社
- 一色八郎「幼児のための科学あそび」(1973)ひかりのくに株式会社
- 林建造・黒川健一・福井明雄「幼児教育法シリーズ絵画製作・造形」(1986)東京書籍
- 福田隆眞・福本謹一・茂木一司「美術科教育の基礎知識」(2010)建帛社
- 東洋館出版社編集部編「平成29年版小学校新学習指導要領ポイント総整理」(2017)株式会社東洋館出版社
- 無藤隆・汐見稔幸・砂上史子「ここがポイント3法令ガイドブック」(2017)株式会社フレール館
- 無藤隆「3法令改訂(定)の要点とこれからの保育」(2017)株式会社チャイルド本社
- 花篤實・新井哲夫・中村晋也(監)「美術1」(2011 文部科学省検定済み教科書) 日本文教出版株式会社
- 酒井忠康 他21名「美術1」(2015 文部科学省検定済み教科書)光村図書株式会社

幼児の領域（表現）と小学校課程（図画工作科及び生活科）との相関について

村川雅弘・堀田力 他 20 名「わたしとせいかつ上」（2014 文部科学省検定済み教科書）日

本文教出版株式会社

水島尚喜・阿部宏行・辻政博ら「図画工作 3・4 下」（2014 文部科学省検定済み教科書）日

本文教出版株式会社

なかやみわ「くれよんのくろくん」（2001）株式会社童心社

要旨

A Study on Correlation about Art Education Curriculum between
Kindergarten and Elementary School

Akio MATSUSHITA

本稿は、2017年3月に告示された「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」と「小学校指導要領」に示された改訂趣旨や改訂の内容を基にした幼児の造形表現と小学校図画工作科及び生活科との相関関係についての研究である。実技科目の詳細な内容にも踏み込んで、幼児から小学校期及び中学校期への相関を明文化したことが、本研究の意義として価値がある。

幼児の領域に関する歴史的な改訂の流れから現在に至るまでの状況や、図画工作科や生活科との関連及び授業のねらいなどについても言及したものであり、造形表現が図画工作から美術科にまで及ぶ子どもの発達や成長に関連する研究としている。また、保育者・教育者養成の各大学に於いても早急に新しい法令等に合った教育内容にすべく改善し取り組まなければならない状況下にあることも述べている。

キーワード ; 図画工作 幼児造形表現 美術教育 幼稚園教育要領 学習指導要領